



## おもいやりの世界に

二十五年間の看護のすえに迎えた今日の  
お通夜お葬式で思うこと。

「看護・看病のあいだに、二つのことを「  
みとる」ことができたのではないか。  
ひとつは「人のいのちの実相（ほんとう  
のすがた）」

元気なあいだは、いわゆる理性をはたら  
かせて見栄・外聞に生きて来た。しかしそ  
の理性をはたらかすからが衰えると、本  
性・本音で生きるしかない。地獄（闘争の  
世界）餓鬼（むさぼりの世界）畜生（はじ  
らいのない世界）を生きるのが、いつから  
ない人間の姿。その実相を見て取った二十  
五年ではなかつたか。

もう一つみとつたことは、地獄や畜生そ  
のままの病人の姿を見た私、こちらの本性  
が見えてきたのではないか。看護している  
親を、ときには「ええかげんどうにかなつ  
てほしい」などと真剣思つたことはなかつ  
ただろうか。老と病とだけが地獄餓鬼では  
なくて、介護してあげている善人と信じて  
いた私自身が、救いようもない地獄餓鬼で  
あつたことを、看護のなかで見取らせてい  
ただいたのではないか。

そしてつくづくと「いつたいいのちとは  
何なのか」を考えざるをえなくなつた。

日本人は、特に戦後五〇年、「生老病死  
」を忌避（あえて目をそむけてきた）して  
生は産院で、老は施設、病も死も病院に  
隔離してその「いのちの実態」を見ようと  
しなかつた。近代の戦争は、ミサイル発  
射画面みて発射ボタンを押すだけで、何  
百のいのちを、なんの心の痛みもなくゲー  
ム感覚で殺せるのだ。

いま子供達は、あのタ、ゴッチにのめり  
死も、ちょっとしたボタン操作で思いのま  
まにあやつることができる。産みの苦しみ  
、老いや病の苦悩、死の恐怖など、その画  
面には見えてはこない。だからもののいの  
ちをとることだつて平氣である。「おもい

やり」のまつたく欠けた世界の中で、神戸  
の連続幼児殺害事件も起こつたのかもしれ  
ない。

命と命との間の「おもいやり」のない世  
界。なんの「つながり」もなく、個々別々  
、我が身勝手に生きて行くのが、殊に最近  
の人間の生き方のように思われる。殊に最近  
結果が、人も町も国も、そのいのちが危な  
くなつて来ている。地球環境問題にみられ  
るよう。

仏法では「縁起」（よつておこる）（も  
のは、あらゆるものとの関係にオイテアル  
）よつてものを見る。他とのつながりのな  
かにいのちを見る。

かかわりあう無量の命の世界に、生きな  
おそうではないか。そこをよりどころに「  
おもいやり」の世界を生きようではないか  
と、お念佛は呼んで下さつてゐるのではないか  
だろうか。



## 本願夕口方正定業

すべて生きとし生きるものいのちは、  
この不可思議な光のなかに、つつまれてい  
る。この真実に、なんとしてもめざめさせ  
てやりたいという、真実そのものの願いか  
ら、名乗り出された「南無阿弥陀仏」とい  
う声こそが、私をはじめとする一切群生を  
往生（如來のいのちにいきる）に導くは  
たらきなのだ。

## 葬儀

十二月八日 久畠  
谷垣 律夫さま

十一月二十五日 栗尾  
岡野 满雄さま

## お仏壇

金子みすず全集

平成十年

## 主な年間行事予定

（すべておおまかな予定です）

お瀬戸でもいだ橙も  
町のみやげの花菓子も  
仏さまのをあげなけりや  
私たちにはとれないの。

だけど、やさしい仏さま、  
ちきにみんなに下さるの。  
だから私はていねいに、  
両手かさねていただくの。

家にやお庭はないけれど、  
お仏壇にはいつだつて、  
きれいな花が咲いてるの。  
それでうち中あかるいの。

そしてやさしい仏さま。  
それを私にくださるの。  
だけどこぼれた花びらを、  
踏んだりしてはいけないの。

朝と晩とにおばあさま、

いつもお燈明（あら）あげるのよ。

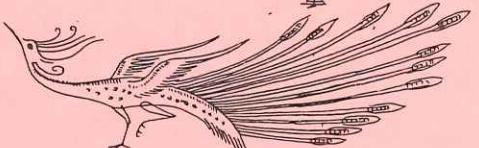
ながはすつかり黄金（こも）だから、

御殿のよう、かがやくの。

だから、私はそういうの、

いつもみみていてくださるの。

「ありがと、ありがと、仏さま。」



毎月の行事	十六日 十六夜会定例法座（真覚寺）
	十日 玉日会定例法座（真覚寺）
	午後2時
	二六日 みのりを聞く会（勝林寺）
	夜7時半
	『勝林寺寺報』 每月一日発刊
	一・十・二〇日

